

がん患者体験記◎浅川澄一

現在、がん治療まっただ中の浅川澄一さんによる体験記です



抗がん剤の副作用が次々出現 味覚異常に加えふらつきも

2014年9月11日、10回目の抗がん剤投与を無事終えた。その1週間前が本来の投与日だったが、血液検査で白血球が足りないため、延期されていた。11日の白血球数は $1\mu\text{l}$ （マイクロリットル）当たり2900個で、3000個の基準値をわずかに下回った。だが、白血球の中の好中球が1640個あり、基準値の1500個を上回っていたのでOKとなった。血小板も基準値を超えていた。

この日は、夕方に厚労省への取材を予定していた。いつものように朝の9時半ごろに病院に着くと、血液検査の後の診察が正午近くになり、それから約3時間近い抗がん剤投与を受け、会計を済ますと、夕方の5時を過ぎてしまう。診察や抗がん剤投与までの待ち時間が長いためだ。

それでは取材に間に合わない。この日は、意を決して早出をすることにした。いささかつらいが仕方がない。病院の受付が始まるのは7時半。その時間に行くと8時半には血液検査を受けられる。血液検査の結果が出るまでに1時間かかるが、午前中には診察を受けることができ、抗がん剤の点滴もほとんど待たされないという。

そして、その通りとなった。何と午後2時にはすべて終わることができた。いつもは、さんざん待たされた後の抗がん剤の投与だが、この日は早々と点滴用のゆったりした椅子に着席でき、気分がいい。



私が受けている抗がん剤は、「5-FU」と「エルプラット」。一般名はそれぞれ、「フルオロウラシル」と「オキサリプラチン」。

この2つを使う療法を「m FOLFOX6」と言い、

通常は「^{フォルフォックス}FOLFOX」と呼ばれる。手術後に再発する可能性の高い大腸がんや再発した大腸がん、手術では完全に切除できない大腸がんなどに対する標準療法だ。がん研有明病院の説明文では「世界各国で行われている治療法です。欧米での治療実績を基にして日本でも承認されています」とある。

私の場合は、手術後の再発可能性が高い大腸がんを封じ込めるために投与している。MRIやCTなど、どんな撮影でもまだ映らないほど微小ながんが体内のどこかで活動している可能性がある。一か所だが肝臓に転移していたので、他の臓器にも転移しているとみられるからだ。

説明文は続けて「海外での代表的なFOLFOX療法の臨床試験では、投与された患者さんのうち、約50%の患者さんががんが半分以上に小さくなったという報告があります」と記している。とても心強い報告だ。

点滴の部屋にはズラリと椅子が並んでおり、その一つに座って投与を待つ。傍らのスタンドからつるした溶液を次々変えていく。

まず、最初は副作用のアレルギーを抑える「クロール・トリメトン」を1cc、5分間かけて注入。次に、吐き気を抑える「アロキシ+デキサート」を7cc、15分間。アロキシは大鵬薬品工業、デキサートは富士製薬工業の製品だという。

これらの副作用を抑える薬が効果を発揮しているのか、抗がん剤の副作用としてよく言われる吐き気はまったくない。有難いことだ。もし吐き気をもなえば日常生活に支障を来たしていただろう。

この2つの副作用防止剤に続いて、抗がん剤の「エルプラット」の出番となる。同時に、やはり抗がん剤「5-FU」の作用増強剤、「レボホリナート」（ヤ

浅川澄一（あさかわ・すみかず）

福祉ジャーナリスト（前・日本経済新聞社編集委員）

慶應大学卒後に日本経済新聞社に入社。小売り・流通業、ファッション、家電、サービス産業などを担当。87年に月刊誌『日経トレンドィ』を創刊、初代編集長。流通経済部長、マルチメディア局編成部長などを経て、98年から編集委員。高齢者ケア、少子化、NPOなどを担当。2011年2月に定年退社。公益社団法人長寿社会文化協会（WAC）常務理事。66歳。



クルトのジェネリック品）を注入する。これが2時間もかかる。

そして最後に「5-FU」を5分間注いで点滴は終了だ。あとは、ペットボトルのような透明な容器に入れた「5-FU」を首からぶら下げたまま帰宅する。46時間後に自宅で外して、今回の抗がん剤治療が完全に終わる。



吐き気とアレルギーの症状はないが、他の副作用はけっこう出てきた。4月1日の第2回目に、早くも手指にしびれを感じる。冷たい麦茶やジュースの缶にさわるとビリッとくる。そのまま飲み込むと、喉にもビリッだ。気持ち悪い。その後、半年たっても状態は変わらない。おもしろいのは、冷たい飲みものを身体が欲しくなくなったことだ。

転移した肝臓を一部切除したのでアルコールはストップしているが、生ビールを飲みたいと思わない。

7月の下旬には、足に異常が出てきた。薄い異物

を足裏にピッタリ張り付けられたような変な感触である。手の指先のしびれより面積が広く、違和感が相当強い。でも、生活にはさささわりのないから、あまり気にしないことにしている。今でも消えない。

8月に入った頃に、別の副作用が起きてきた。味覚異常である。食べ物の味がよくわからない。昨晚もこの季節の楽しみである、さんまを焼いて大根おろしで食べたが、今までほどには美味しく感じられない。何よりも焼き魚独特の香りがまったく届かない。

焼き物だけでなく煮物の味も半分ほどしかわからない。炊き立ての白米も同様だ。

抗がん剤を始めてすぐに食欲が著しく減退し、食事時間が来たから食卓にやむなく着く状態が続いている。食べないと、エネルギー不足で日常生活が難しくなりそうなので食卓に向かう。

味覚異常でも甘味は十分感じる。それに果物を身体が欲する。今まであまり好物ではなかったトマトを何とほぼ毎日のように食べるようになった。リンゴやナシもこれまで通りの味だとわかる。かりん



食べられる食品。嫌いだったトマトが好物に。
今のマイブームは日本茶



食べられない食品。冷たい飲み物が気持ち悪い……
ビールも飲みたくなかった

どうや饅頭もおいしい。

ドリアやラザニア、パスタ類など電子レンジで調理する簡単なメニューもよく食べる。温かく、あまり歯ごたえのないものが多いようだ。ポットで沸かした湯で日本茶を飲む機会も格段に増えた。

加えて、口内炎の前期症状のような状態が時々起きる。突起物が口の中にできるのは何とも不愉快。長く続かないことで助かっている。これが味覚異常を増進させているのだろうか。



もう一つ、厄介なことが増えた。身体のふらつきだ。椅子やベッド、ベンチなどから立ち上がるときに身体が安定しない。足腰が揺れて、フラフラッとなってしまう。一か月ほど前には転んでしまった。抗がん剤の点滴を受けるために通院したときだ。

病院でしばらく待たされ、椅子に座って新聞を読んでいた。立ち上がった瞬間に足元が乱れて、腰から落ちて倒れた。眼鏡が飛び、「あっ」と声を出してしまう。

そんなふらつきが、自宅でも起きる。夜間にトイレに行こうとベッドから出るときが危ない。明かりがないから手で支えるところが見つからない。

この頃は、立ち上がる動作をできるだけゆっくりするようになった。担当医に聞くと「副作用としてはあまり聞いたことがないです」とつれない回答。原因がわからないのは気持ちが悪い。でも仕方ない。

副作用がどのようなメカニズムで起きるかはよくわからないようだ。また、人によってその出方もさまざま。最大の問題は抗がん剤の効果が判明しないまま副作用がひどくなることへの苛立ちだ。

……そんな不安を抱えながら9月20日からロンドンに視察旅行に出発する。🌍



三好春樹がなんでも答えます

三好さん!!



Q ハードなスケジュールのなかで、どのように体調、健康管理をしていますか？



1日5回の癒しがあります。まず食事。これで3回、風呂と寝ること。これで5回。特別なことじゃないので、どんなときでも健康管理できます。**3回の食事のうちの1回には必ず酒が入りますけどね。**

Q インドへ行こうと思ったきっかけを教えてください



最初は偶然です。で、これはコトバでは伝わらないと思って、まわりの人に同じ体験してもらおうと、それ以来11回、来年2月と3月で13回目です。貯金してもそのうちハイパーインフレで価値はなくなります。それより体験に代えておきましょう。こちらは価値が下がったりしません。

●三好春樹へのご質問はブリコ編集部まで！常識の範囲内でどんなことにもお答えします。●

E-mail : brico@nanasha.co.jp FAX : 03-5911-0771

